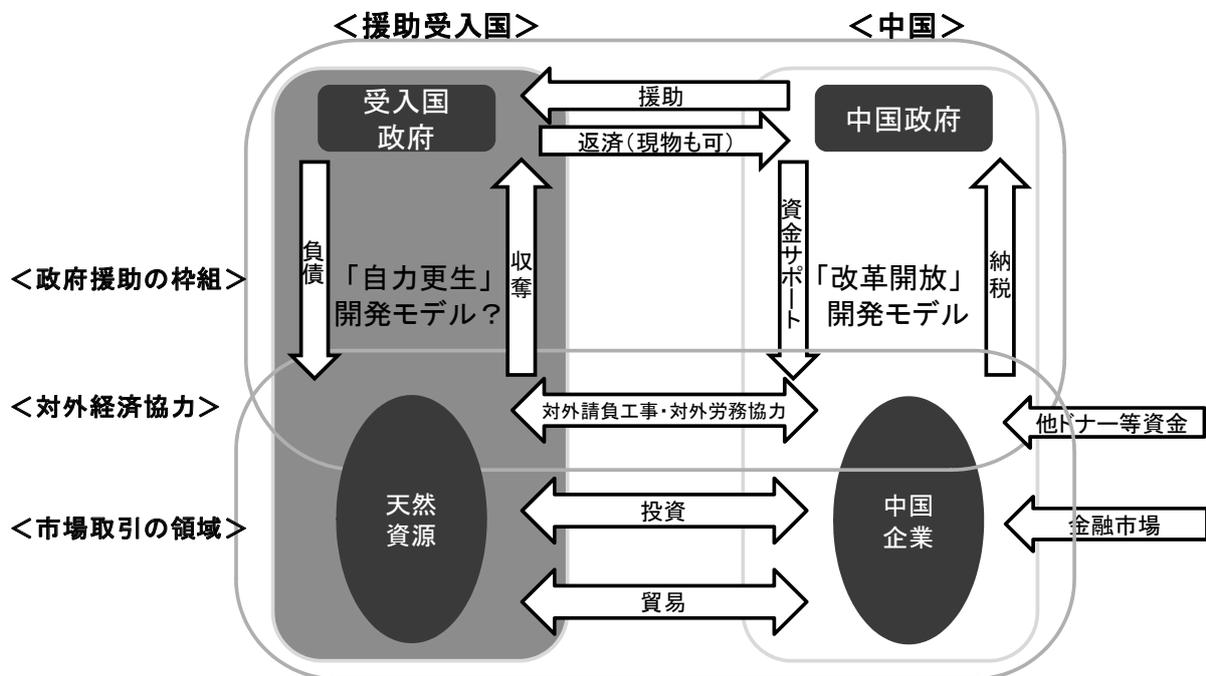


第二章 中国援助に関する「通説」の再検討¹ —伝統ドナーからの乖離と途上国への開発効果

小林誉明

1. はじめに

中国による対外援助は、伝統的なドナー（DAC ドナー）によって供与される開発援助（ODA）とは異なるものとして注目されている。まず、援助事業を実施する主要プレーヤーを自国の国営企業とし、タイドを条件として供与される中国の援助は、実質的には自国企業の海外進出への補助金給付と同義であり、アンタイド化が進展している DAC 諸国の ODA とは大きな相違があるといわれている。また、内政不干涉の立場から、人権侵害やガバナンスの問題がある国も供与先になり得る点は、コンディショナリティを付与する DAC ドナーと対照的とされる。また、特にアフリカの資源国に対しては、援助受入国の資源との間である種の“バーター”の形で援助を行い、自国の開発と受入国の開発とを同時に達成しようとするアプローチは、“中国型開発援助モデル”とも呼べる独自の特質とも捉えられる（図表1）。



図表 1 市場取引と渾然一体となった援助アプローチ

出所：小林（2007）

こういった特徴をもつドナーとしての中国は、援助コミュニティにおいて、「国際開発のランドスケープを塗りかえ」(Manning 2006: 384)「ゲームのルールの変更を促す『静かな革命』」(Woods 2008: 1221)を引き起こすほどの大きなインパクトをもたらす存在として認識されている。これは、中国の「ふるまい」が伝統ドナーとは全く異なるように見え、その差異が伝統ドナーが長年かけて構築してきた「規範: Norms」や「基準: Standards」と抵触するからに他ならない²。こうした規範や基準は、DAC/OECDを中心とした国際的枠組において合意されてきたものであり、伝統ドナーのコミュニティがODAの実践を通じて共有するにいたったコンベンショナルな価値が具現化されたものといえる(Mohan and McBride 2009: 86)。あるべきとされる規範・基準は時代とともに変化し続けており、例えばODAに該当する最低限の要件(定義)は「開発目的³」「譲許性⁴」であるが(OECD 2006: 16)、より援助の効果を高めるべく、「アンタイト」「コンディショナリティ」「セレクトイビティ」「協調行動」といった行動準則も追加されていった⁵。しかし、これらの規範・基準が途上国の開発に普遍的に効果をもつと断定することはできない。あくまで、これらを遵守することは「途上国の開発にとってより効果的であるはず」という「仮説」に過ぎず、日々の援助の実践のなかで絶えずテストされ続けているといえる。実際、「援助効果」の議論は一部のドナーから提起されたものであるが、途上国にも多様性があるなかで本当に効果をもつのかについて争いもあり、研究上も論争を巻き起こした。中国をはじめとした新興ドナーの登場はこうした状況に再び火を付けた。伝統ドナーのコミュニティがあたりまえの「前提」と捉えてきた各種規範・基準に挑戦し(Tan-Mullins et al. 2010)、その真価を問うているという意味で中国のインパクトは大きい⁶。

本章では、伝統ドナーが共有する主要な規範・基準をとりあげ、(1) 伝統ドナーの規範・基準に照らして中国のふるまいはどのくらい乖離しているか、(2) その乖離は途上国の開発にどのような効果をもたらすか、という二つの観点から中国の援助の意味を検討する。伝統ドナーから構成される援助コミュニティにおける中国への着目は、「中国は、伝統ドナーが決めてきたルールを逸脱し、途上国開発に悪影響をおよぼすのではないか」という懸念を背景とするが、新興ドナーの存在は、「異なるやり方(援助手法)でも同じことが達成できる(開発効果がある)のであれば、異なるやり方でもいいのではないか」という「Differentiated approach」の必要性を提起している可能性もある。

2. 伝統ドナーの規範・基準に照らして中国のふるまいはどのくらい乖離しているか

中国をはじめとした新興ドナーはこれまで、伝統ドナーが備えている特質からの「乖離」によって評価されてきた (Kim and Lighthfoot 2011: 715)。しかし、中国援助の特質が必ずしも特異というわけでもなさそうである。金熙徳 (2004) は、「1995 年下半期より、中国は対外援助方式の改革に乗り出し、優遇借款と対外援助合資方式を積極的に導入した。その形態は、『輸出振興型』または『貿易、投資、援助三位一体型』ともいべきもので、まさに戦後の日本型 ODA とかなり似てきている」と述べる。Bräutigam (2009: 24-25) も「中国は、かつて日本が中国で行ってきた商業的利益と援助を結びつける手法を模倣し、それをアフリカで応用している」。かつて日本が中国をはじめとした途上国へ向けて行った、貿易、投資、援助の「三位一体型」アプローチと極めて類似性があると指摘する⁷。

最新の実証研究からは、伝統ドナーと新興ドナーの親和性も見出されてきており、以下にて 6 つの観点から、中国援助の伝統ドナーとの差異を検討する。

コンテンポラリー 時系列	欧州等	日本	中国
かつて	アフリカ重視 社会セクター DACルール 無償 貧困削減 プログラム型 アンタイド 政治動機	アジア重視 インフラ DACルール外 有償 自立重視 プロジェクト型 タイド 経済動機	アフリカも重視 軽工業 DACルール外 無償 自立重視 プロジェクト型 タイド 政治動機
現在		アフリカも インフラ DACルール 有償 自立重視 プロジェクト型 アンタイド 政治動機	アフリカも重視 インフラ DACルール外 有償化 自立重視 プロジェクト型 タイド 経済動機

図表 2 中国援助の位置づけ

出所：小林誉明 (2007b) を改変。

* 太字は日本と中国との共通点を示している。

(1) 「開発目的」について

中国の援助については特に、途上国の開発のためではなく、自国の開発に必要な市場や資源の獲得 (Alden 2005; Tull 2006: 468-471; Lum et al. 2009) ⁸、政治的利益獲得 (Kragelund 2008: 577) といった国益を目的に行われているのではないかという批判に晒されることが多い。アンゴラ等では、資源と引き換えに企業による投資や貿易に必要なインフラを提供するという取引がなされているともいわれている (Kiala 2010)。

ところが最新の実証研究では、その中国でさえ、他ドナーに比べて特に資源国に向かってはいえないことが明らかにされており (Dreher and Fuchs 2011) ⁹、非難されるいわれがないことが示唆される。

(2) 「譲許性」について

DAC は「援助の条件に関する DAC 勧告」において、援助全体額 (コミットメント) のグラント・エレメントが 86% を超えることを各ドナーに求めている。欧州ドナーを中心として譲許性の高い援助への志向は根強いが、中国、インド、タイ、韓国等、アジアの新興ドナーの多くはローンのスキームを活用しており、対照的である。とりわけ中国のローンについては、譲許性の高い優遇借款や無利子借款と商業ベースの輸出信用等とがパッケージで提供されている点も批判の対象となってきた (Bräutigam 2011: 757)。

しかし、中国が 2011 年 4 月に公表した初の『中国対外援助白書』を見る限り、「対外援助」として計上している優遇借款の条件は DAC の設定するグラント・エレメント 25% 以上にほぼ該当することがわかっている ¹⁰。なおローンを活用しながらもソフトな条件で運用している点は、アラブ・ドナーも同様である。また、ローンを活用している新興ドナーも、ローンだけを用いているのではなく、技術協力や無償など多様なスキームを駆使していることが多い。

(3) 「アンタイド」について

中国の援助は、調達においてタイドであるといわれている (Kragelund 2008: 577)。これは、自国の企業利益を担保するためであるが、自らも途上国であるがゆえに保護される権利があるということを正当化するためのレトリックが「互惠原則／Win-Win」である (Zimmermann and Smith 2011: 732)。実際、古くからアンタイドを実践しているアラブ・ドナー (Manning 2006: 378) は自らの援助を「南南協力」とは位置づけない。

(4) 「コンディショナリティ」について

中国による援助は概して無条件に供与されることが多いとされる。これは、援助ではなくあくまで「南南協力」であるがゆえに、内政不干渉の原則を遵守しているからとされる (UNCTAD 2010: 24) ¹¹。そもそも環境やガバナンスなどに関する中国国内の基準も高いわけではないので、外国に対して自国より厳しい条件をつけるのは無理があるという説明もなされる (Paulo and Reisen 2010: 540)。

(5) 「セレクトイビティ」について

世界銀行による「援助の有効性」研究の報告書 (1998) において「貧困が深刻でありかつガバナンスの良い国に援助を集中的に配分するのが最も効率的な援助である」という結論が導き出された ¹²。これを根拠として、援助供与先を選択的に絞り込もうという戦略が打ち出された。

これとは対照的に、中国は、西欧から制裁を受けている国 (Tull 2006: 468)、「ならずもの」国家 (Naim 2007)、ガバナンスが悪い国 (Halper 2010: 100-101)、脆弱国家 (Kaplinsky et al. 2007: 8) に支援を集中させる傾向があることが指摘されている ¹³。ところが実際には、伝統ドナーの援助も理念と実態は乖離しており、汚職のある国に援助をしていたりすることは以前から指摘されている (Alesina and Weder 2002)。実際、中国をはじめとした新興ドナーを含めた援助配分のマクロ実証分析の結果、特に新興ドナーだけがガバナンスの悪い国に援助をしているわけではないことが実証されている (Dreher et al. 2011) ¹⁴。

(6) 「協調行動」について

中国は、DAC 等の国際的な枠組に参画せず、手続の調和化などの協調行動をとることは多くない。ただし、援助現場レベルでは、ドナーグループ会合への (オブザーバー) 参加や援助情報データベースへの援助額の提供などが進んでいるケースも見受けられる。

3. 伝統ドナーからの乖離した援助は途上国の開発にどのような効果をもたらすか

中国による援助の途上国開発へのネガティブな効果を懸念する論考は多い。しかし、そのことを実証した研究は、特定の国における個別の事例研究を除いては、実はほとんど見つかからない。むしろ、中国による援助が開発向上に寄与した可能性を示唆する実証研究も

出始めている。これらの研究成果は、限られたデータに基づいた分析であるため、普遍的な結論を導くことはできない。以下、6つの観点から検討する。

(1) 「開発目的」について

援助が途上国の開発を目的とせず供与されれば、開発に負の影響を及ぼすことは想像に難くない。雇用や資源の収奪を引き起こす危険性から (Collier 2008)、「新重商主義」と批判されることもある (Woods 2008: 1218)。中国は途上国の人々の長期の生活の改善にはまったく関心をもっていないのではないかという批判も向けられる (Naim 2007)。実際、中国が援助を供与しているアフリカからは、中国の関与によって繊維産業などにおいて失業者の増大という事態が生み出されており、Win-Win という約束とは程遠いという批判もなされている (Tull 2006: 471-3)。その一方で、新興ドナーによる援助を受けた国で実際に経済破綻に陥ったというケースは見当たらないという反論もなされている (Woods 2008:1208)。

これまでのところ、開発を目的としない援助が実際に開発に負の影響を及ぼすかどうかは明らかになっていない。これは裏を返せば、たとえ自国の国益に帰することを意図して行われた援助であったとしても、結果として途上国の開発に寄与する場合もあるということの意味する。実際、例えば中国との協力関係を築いている途上国のなかに順調な経済成長の軌道に乗っている国はたやすく見つけることができるという (Woods 2008:1208)。つまり「ODA ではないが開発的な効果をもつ (not ODA but developmental)」(Bräutigam 2011:757-759) 国家活動というものが成り立つ余地が示唆される。こうした、「開発投資」的な意味合いをもつ援助に、アジアのドナーに共通の特徴を見出す論者も増えてきている (Saidi and Wolf 2011; Soderberg 2010)。そして、このような成長促進への直接的な支援こそが途上国が長らく望んでいたことであると評価されうる (Woods 2008: 1218)。

(2) 「譲許性」について

中国をはじめとした新興ドナーによるグラントではない援助の活用が、途上国の開発を阻害したという証拠は見つかっていない。むしろローンによって大規模なインフラ開発プロジェクトが可能となるが、インフラ開発プロジェクトによる開発への正の効果はアジアにおける日本の援助で実証済みである (Shimomura 2011)。実際、中国やインドをはじめとするアジアの新興ドナーはインフラ分野に特化する傾向があるが (Kragelund 2008:

579; Foster et al 2009; IMF 2011: 24)、これまで社会セクターばかりに集中してきた伝統ドナーが提供してこなかったものを提供していると評価できる (Davies 2010: 14; Sato et al. 2010/2011) ¹⁵。

こうして、開発が達成されるために必要なインプットは譲許性の高い援助でファイナンスされなければならない必然性はないという議論が出始めている。Moyo (2009) は、援助の受け手の立場から、譲許性の高い援助はむしろ「援助依存」を引き起こすため、譲許性の低い商業ベースの融資の必要性を説く。こうした文脈において、アフリカにとって中国は「絶好の機会」として歓迎される。

(3) 「アンタイド」について

Manning (2006: 382) は、自国の企業などからの圧力に誘導されて綿密な審査を行わないとしたら、不適切な技術へのバイアスがかかったり、維持することが難しい野心的すぎる案件や非生産的な案件に手をつけてしまうリスクがあることを指摘する。実際、アフリカにおいてタイド援助の増大が援助の全体効率を低下させている可能性も報告されている (Kragelund 2008: 577)。また、雇用促進や技術移転を伴わないことによって、現地経済への波及効果も限定されることも懸念される (Saidi and Wolf 2011: 29)。

これに対して、海外から流入する労働者が技術移転のチャンネルになるという分析もなされている (Mohan and Tan-Mullins 2009)。また、自らが開発過程において直面した同様の経験に基づいてよりニーズに適った援助ができるのが新興ドナーの利点とする立場から (Davies 2010: 14)、タイドの効用も擁護されうる。

現在までのところ、中国によって援助がタイドで供与されることの開発効果は明らかになっていない。負の効果のみならず正の効果もあるかもしれないが、受入国政府はメリットとデメリットの間でトレードオフに直面することになる (Saidi and Wolf 2011: 29)。

(4) 「コンディショナリティ」について

中国が実践する無条件な支援は、政治エリートの延命に寄与するといった批判も多い (Tull 2006: 473-475)。しかし、伝統ドナーもコンディショナリティを通じたガバナンス改善には成功してきたとは決していえない (Mold 2009) ¹⁶。

この点につき、Saidi and Wolf (2011: 27-28) によれば、コンディショナリティ無しの援助が、アフリカにおいてガバナンス指標を悪化させているという仮説は反証され、むしろ

ろインドや中国の援助が活発なナイジェリアでポジティブな結果がでている。また市民への公共財・サービスのデリバリーの指標については、中国との間で資源とインフラの取引が活発なコンゴ民主共和国とアンゴラを含む5カ国で2001～2008年までの間に大きな改善がみられたという。なお、より条件の緩やかなドナーの乗り換えがあちらこちらの被援助国で起こっているようであるが、コンディショナリティの有無の作用かどうかについては現在までのところ実証できていない。

(5) 「セレクトイビティ」について

伝統ドナーの基準からみてガバナンスやアカウンタビリティに問題のある国にDAC諸国が支援を見合わせている間に、中国が支援に着手したとすれば、必要な改革の先送りを招き (Manning 2006: 381)、環境や人権問題の悪化を助長する危険性が指摘されている (Naim 2007)。特に新規のローンの存在は、旧HIPCs国が新たに資金を借りこむ誘惑に駆られ再び重債務国に陥るリスクをもたらすとされる (Manning 2006: 381-2)¹⁷。

ところが、Reisen and Ndoye (2008: 41-42)によれば、債務救済国に対する「軽率な貸し手」という証拠は見つかっていない。中国のプレゼンスが大きいアンゴラやスーダンをはじめとして、むしろ債務指標が改善し、輸出とGNPの向上に寄与しているというデータが示されている (Reisen and Ndoye 2008: 38-39)。

(6) 「協調行動」について

ドナーの協調行動が必要な根拠は、もしもドナーの数が増えて調整されない援助の「氾濫 (proliferation)」が起こると、個々の案件の「断片化 (fragmentation)」が進み、受入国の援助吸収能力を超え (Kragelund 2008: 577)、途上国の取引費用が増大してしまうからである (Acharya et al. 2006)¹⁸。中国をはじめとした新興ドナーの登場による援助アーキテクチャーの複雑化がこの問題に拍車をかけることの懸念が表明されている (IDA 2007: 12-14)。

こうした問いに対する研究者からの回答はどうか。断片化は分野ごとに異なり、特に社会セクターにおいて発生していることが明らかとなっている (Frot and Santiso 2010a)。加えて、断片化は新規参入のみによって起こっているのではなくマルチ・ドナーの氾濫によって発生しており (Reisen 2009)、そもそも中国が特化しているインフラは巨大プロジェクトであり (Saidi and Wolf 2011: 28)、かつ新規参入でもない (Paulo and Reisen 2010:

539) ため、批判の対象としてお門違いと反論することが可能である。実際、2009年に実施されたカンボジアを事例とした研究では、中国等のアジア新興ドナーが提供するインフラ分野では断片化は発生せず、実は調整されていないのは伝統ドナーのほうであることが明らかとなっている (Sato et al. 2010/2011)。

こうした断片化が起こるのは、援助の供給者間の競争の欠如にあると、問題の本質を喝破したのが、Frot and Santiso (2010b) である。すなわち、もしも“援助市場”が競争的であるなら、援助受入国はよりスキルのある効率の良いドナーを選ぶため、非効率的なドナーは駆逐され、断片化は自ずと解消されるはずという。この意味で、中国の参入は、伝統ドナーの旧態依然とした非効率性を白日のもとに曝すことによって、ドナー間の競争原理を誘発するというシステミックな効果がある (Woods 2008: 1206) ¹⁹。途上国の立場に立てば、伝統ドナーとの関係をマヌーバーできる自由が広がり (Manning 2006: 381)、交渉力が強まり (Woods 2008: 1206)、政策スペースが広がり (Paulo and Reisen 2010: 535)、オーナーシップが高まる (Kragelund 2008: 579)、といった効果が期待できるであろう。「ワシントン・コンセンサス」を越えて「アイデアや政策モデルに関する新たなグローバルな競争」の時代が展開することを予感する声もある (Birdsall and Fukuyama 2011: 53)。

だがその一方で、(中国によるアフリカ支援の文脈で) 西欧にくらべて中国がことさら良いわけでもなく (Tull 2006: 476)、西欧ドナーに変わる新たな選択肢が増えるからといって、それが被援助国の (一部のエリートではなく) 人々の利益に本当に繋がるのかどうかはわからないという指摘もあり (Tull 2006: 466)、今後の検証が必要となる。

4. おわりに

中国援助の効果が部分的にでも実証されたこと、少なくとも反証されなかったことが、伝統ドナーによる援助効果の議論に与えるインパクトは決して小さくないであろう。なぜなら、伝統ドナーがその規範や基準に価値を置くのは、そのような援助を行うことが「途上国の開発にとって効果があるはず」と信じてきたからに他ならないが、伝統ドナーとは全く異なるふるまいをしていたとしても実態としてそれほど大きな問題になっていないのだとしたら、これまで遵守してきた規範や基準の有効性そのものが疑義をもたれることになるからである。中国をはじめとした新興ドナーの登場によって問われているのは、新興ドナーのパフォーマンスではなく、むしろ伝統ドナーが守ってきた援助のやり方のほうであり、それは「今でも有効なのだろうか？」という点である (Kim and Lighthfoot 2011:

714-5)。新興ドナーが提供する代替的な開発モデルが、伝統ドナーによる開発協力システムの正統性に危機をもたらしているといえよう (Zimmermann and Smith 2011: 733)。

伝統ドナーによる援助が本当に有効であったのだとしたら、中国等による援助の効果との差異が実証されるはずであるが、確たる証拠はなかなかでてきていない。新興ドナーは、伝統ドナーと異なるふるまいをしながらも、援助効果を超えた開発効果 (Development Effectiveness) をもたらす実践をしているものとも評価されうる (Davies 2010: 15) ²⁰。新興ドナーによる「援助政策の是非」だけでなく、途上国に対してもたらす「総合的なインパクト」にも着目するべきであるとの Manning (2006: 384) の主張を受け、DAC もメンバー以外から学ぶべきことが多いことに気づき始めた (Zimmermann and Smith 2011: 734)。「China-DAC Study Group」の試みをはじめ中国との連携を模索するのみならず、自らのレジームそのものの修正に取り組み始めている。その背景には、植民地解放後の時期に形成された、豊かな国と貧しい国との援助ベースの関係を規定する DAC の基準やルールが時代遅れとなってしまったという事実 (Bräutigam 2011: 753) があることは否定できない。

参考文献

- Acharya, Arnab, Ana Teresa Fuzzo de Lima and Mick Moore. (2006) “Proliferation and Fragmentation: Transaction costs and the value of aid,” *Journal of Development Studies*, 42(1), 1–21.
- Alden, Chris. (2005) “Red Star, Black Gold,” *Review of African Political Economy*, 32, 104/5: 415–19.
- Alesina, Alberto and Beatrice Weder. (2002) “Do Corrupt Governments Receive Less Foreign Aid?” *American Economic Review*, 92(4), 1126–1137.
- Birdsall, Nancy and Francis Fukuyama. (2011) “The Post-Washington Consensus: Development after the Crisis,” *Foreign Affairs*, 90 (2), 45–53.
- Bräutigam, Deborah. (2009) *The Dragon’s Gift: The Real Story of China in Africa*, Oxford: Oxford University Press.
- Bräutigam, Deborah. (2011) “Aid ‘With Chinese Characteristics’: Chinese Foreign Aid and Development Finance Meet the OECD-DAC Aid Regime,” *Journal of International Development*, 23, 752–764.
- Chandy, Laurence and Homi Kharas. (2011) “Why Can’t We All Just Get Along? The Practical Limits to International Development Cooperation,” *Journal of International Development*, 23(5), 739–751.
- Collier, Paul. (2008) “Implications of Changed International Conditions for EITI,” Extractive Industries Transparency Initiative, accessed November 17, 2011.
- Collier, Paul and David Dollar. (2002) “Aid Allocation and Poverty Reduction,” *European Economic Review*, 46(8), 1475–1500.
- Davies, Penny. (2007) *China and the End of Poverty in Africa: towards Mutual Benefit?* Sundbyberg: Diakonia.

- Davies, Penny. (2010) “A Review of the Roles and Activities of New Development Partners,” *CFP Working Paper Series*, No.4, Washington, DC: World Bank.
- Dreher, Axel and Andreas Fuchs. (2011) “Rogue Aid? The Determinants of China’s Aid Allocation,” *CESifo Working Paper Series*, No. 3581, Munich: CESifo.
- Dreher, Axel, Peter Nunnenkamp and Rainer Thiele. (2011) “Are ‘New’ Donors Different? Comparing the Allocation of Bilateral Aid between nonDAC and DAC Donor Countries,” *World Development*, 39(11), 1950–1968.
- Foster, Vivien, William Butterfield, Chuan Chen and Nataliya Pushak. (2009) *Building Bridges: China’s Growing Role as Infrastructure Financier for Sub-Saharan Africa*, Washington, DC: the World Bank.
- Frot, Emmanuel and Javier Santiso. (2010a) “Crushed aid: Fragmentation in Sectoral Aid” *OECD Development Centre Working Paper*, No. 284, Paris: OECD.
- Frot, Emmanuel and Javier Santiso. (2010b) “Crushed aid: Why is fragmentation a problem for international aid?” VoxEU.org. January 18, 2010.
- Halper, Stefan. (2010) *The Beijing Consensus: How China’s Authoritarian Model Will Dominate the Twenty-First Century*, New York: Basic Books.
- IDA. (2006) *IDA Countries and Non-Concessional Debt: Dealing with the ‘Free Rider’ Problem in IDA14 Grant-Recipient and Post-MDRI Countries*, World Bank.
- IDA. (2007) *Aid architecture: An overview of the main trends in official development assistance flows*, World Bank.
- IMF. (2011) *New Growth Drivers for Low-Income Countries: The Role of BRICs, Prepared by the Strategy, Policy, and Review Department*, IMF.
- Kaplinsky, Raphael, Dorothy McCormick and Mike Morris. (2007) “The Impact of China on Sub-Saharan Africa,” *IDS Working Paper*, 291.
- Kiala, Carine. (2010) “The Impact of China-Africa Aid Relations: The Case of Angola,” *AERC Policy Brief*, No1.
- Kim, Soyeun and Simon Lightfoot (2011) “Does ‘DAC-Ability’ Really Matter? The emergence of non-DAC Donors: Introduction to Policy Arena,” *Journal of International Development*, 23(5), 711-721.
- Kondoh, Hisahiro, Takaaki Kobayashi, Hiroaki Shiga, and Jin Sato. (2010) “Diversity and Transformation of Aid Patterns in Asia’s ‘Emerging Donors,’” *JICA Working Paper Series*, No. 21, Tokyo: JICA Research Institute.
- Kragelund, Peter. (2008) “The Return of Non-DAC Donors to Africa: New Prospects for African Development?” *Development Policy Review*, 26(5), 555–584.
- Lagerkvist, Johan. (2010) “Chinese and African Views on Chinese aid and Trade in Africa,” Jens Sorensen ed. *Challenging the Aid Paradigm: Western Currents and Aisan Alternatives*, New York: Palgrave MacMillan.
- Lum, Thomas et al. (2009) “China’s foreign aid activities in Africa, Latin America and Southeast Asia,” *CRS Report for Congress*, R40361, Washington, DC: Congressional Research Service.
- Mahon, Rianne and Stephen McBride. (2009) “Standardizing and Disseminating Knowledge: the role of the OECD in global governance,” *European Political Science Review*, 1(1), 83–101.
- Manning, Richard. (2006) “Will ‘Emerging Donors’ Change the Face of International Co-operation?” *Development Policy Review*, 24(4), 371–385.
- Mold, Andrew. (2009) *Policy Ownership and Aid Conditionality in the Light of the Financial Crisis: A Critical Review*, Paris: OECD Development Centre.
- Moyo, Danbisa. (2009) *Dead Aid: Why Aid Is Not Working and How There Is a Better Way for Africa*. New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Naim, Moisés. (2007) “Rogue Aid,” *Foreign Policy*, 159(March/April), 95–96.
- Nissanke, Machiko and Marie Söderberg. (2011) “The Changing Landscape in Aid Relationships in Africa: Can China’s Engagement Make a Difference to African Development?” *UI papers*. 2011/2.
- OECD. (2006) *DAC in Dates: the History of OECD’s Development Assistance Committee*, OECD.

- Paulo, Sebastian and Helmut Reisen. (2010) “Eastern Donors and Western Soft Law: Towards a DAC Donor Peer Review of China and India?” *Development Policy Review*, 28(5), 535–552.
- Reisen, Helmut (2009) “The Multilateral Donor Non-System: Towards Accountability and Efficient Role Assignment,” *Economics Discussion Papers*, No 2009-18.
- Reisen, Helmut and Sokhna Ndoye. (2008) “Prudent versus Imprudent Lending to Africa: From Debt Relief to Emerging Lenders,” *OECD Development Centre Working Paper*, No. 268, Paris: OECD.
- Saidi, Dahman, Myriam and Christina Wolf. (2011) “Recalibrating Development Co-operation: How Can African Countries Benefit From Emerging Partners?” *OECD Development Centre Working Paper*, No. 302, Paris: OECD.
- Sato, Jin, Hiroaki Shiga, Takaaki Kobayashi and Hisahiro Kondoh. (2010) “How Do ‘Emerging’ Donors Differ from ‘Traditional’ Donors?: An Institutional Analysis of Foreign Aid in Cambodia,” *JICA Working Paper Series*, No. 2, Tokyo: JICA Research Institute.
- Sato, Jin, Hiroaki Shiga, Takaaki Kobayashi and Hisahiro Kondoh. (2011) “Emerging Donors’ from a Recipient Perspective: An Institutional Analysis of Foreign Aid in Cambodia,” *World Development*, 39(12), 2091–2104.
- Severino, Jean-Michel and Olivier Ray. (2009) “The End of ODA: Death and Rebirth of a Global Public Policy,” *CGD Working Paper*, No. 167, Center for Global Development.
- Shimomura, Yasutami (2011) “Infrastructure Construction Experiences in East Asia and Sub-Saharan Africa: A Comparative Study for Mutual Learning,” paper presented at SOAS International Workshop on Aid and Development in Asia and Africa, Tokyo, JICA, February 17, 2011.
- Six, Clemens. (2009) “The Rise of Postcolonial States as Donors: a challenge to the development paradigm?” *Third World Quarterly*, 30(6), 1103–1121.
- Söderberg, Marie (2010) “Challenges or Complements for the West: Is There an Asian Model of Aid Emerging?” in Jens Stilhoff Sørensen ed. *Challenging the Aid Paradigm Western Currents and Asian Alternatives*, Palgrave Macmillan.
- Tan-Mullins, May, Giles Mohan and Marcus Power. (2010) “Redefining ‘Aid’ in the China-Africa Context,” *Development and Change*, 41(5), 857–881.
- Tull, Denis M. (2006) “China’s engagement in Africa: scope, significance and consequences,” *Journal of Modern African Studies*, 44(3), 459–479.
- Woods, Ngaire. (2008) “Whose Aid? Whose Influence? China, emerging donors and the silent revolution in development assistance,” *International Affairs*, 84(6), 1205–1221.
- World Bank. (2000) *Assessing Aid: What Works, What Doesn’t, and Why*. New York: Oxford University Press.
- Zimmermann, Felix and Kimberly Smith. (2011) “More Actors, More Money, More Ideas for International Development Co-operation,” *Journal of International Development*, 23(5), 722–738.

— 注 —

- 1 本章記載内容の多くは、小林誉明(2011)「援助効果向上に対する新興ドナーの挑戦」『開発援助研究レビュー』JICA 研究所、に拠る。
- 2 DAC を中心に形成されてきた規範や基準を、Kim and Lightfoot (2011) は「DAC ability」と呼び、Paulo and Reisen (2010) は「ソフト・ロー」と形容する。
- 3 途上国の経済開発や福祉の向上に寄与することを主たる目的とすること。
- 4 資金協力について、その供与条件が開発途上国にとって重い負担にならないように、グラント・エレメントが 25%以上であること。
- 5 アンタイド：援助プロジェクトの調達を自国企業に限定せず競争的に行うこと、コンディショナリティ：援助供与に際して相手国に条件を求めること、セレクトイビティ：援助の効率を上げるために供与先を絞り込む事、協調行動：手続きの調和化をはじめとしたドナ

- 一間の調整の枠組に参画すること。
- 6 こうした状況を受けて、「ODA の終焉」を唱える議論もある一方で (Severino and Ray 2009)、新興ドナーの援助のあり方にパリ宣言の原則との共通点が読みとれるとする論考もある (Chandy and Kharas 2011: 742-745)。
 - 7 中国援助を所管する商務部対外援助司はその年次報告書のなかで、「新しい内外の状況の急激な変化に対して、これまでの政府間の協力だけでは対応できないため、対外援助の新たな方式が案出されねばならない。そのための方式が『援助と投資と貿易とのコンビネーション』である」(Zhang 1996)と表明している。また、優遇借款の実施機関である中国輸銀は、「中国輸銀は、途上国における運輸、通信、エネルギーといったインフラ建設事業をサポートし、途上国の投資環境改善に役立ててきた。また、優遇借款の拡大は、中国製品の輸出を助け、中国企業の途上国の市場への参入を促進してきた」(Export-Import Bank of China 2006)と明言している。このように中国援助の当事者も、援助が貿易や投資と三位一体で推進されていることを事実上認めている。
 - 8 自国の経済利益獲得のために貿易や投資とパッケージとなって展開される中国の援助の方式は、かつての日本の「三位一体型アプローチ」を模倣したものともいわれる (Bräutigam 2009; Nissanke and Söderberg 2011)。
 - 9 ただしデータの制約上、欠損となっている優遇借款分を入れたら結果が変わる可能性は残っている。
 - 10 もっとも、金利が低い現在においてはグラントエレメント 25 という条件そのものが譲許性の定義としては時代遅れと指摘されている (Manning 2006: 378; Bräutigam 2011: 754)。
 - 11 ただし、例えば中国は、台湾の代表権を認めないことという事実上の政治的コンディショナリティを付けている。
 - 12 このような「貧困効率的」な援助配分が行われるとすれば、貧困から解放される人の数は現在値から倍増するという推計がある (Collier and Dollar 2002)。
 - 13 これらの国の多くが、重債務国 (HIPCs) と重なる。
 - 14 ただし、新興ドナーによる援助の太宗を占めるはずの、中国やインドのデータは欠損。
 - 15 更には、こうした開発モデルそのものが、援助を受ける途上国にとっても手本にすべき「代替的な開発モデル」の提示になっているとも評価できる (Lagerkvist 2010: 176)。
 - 16 こうした伝統ドナーによって推進されてきた、時代によってころころと変わるコンディショナリティへの幻滅があるなかで、主権を尊重し、対等に接する態度は、被援助国からも受け入れやすいものであるという評価もなされる (Woods 2008: 1216-7)。
 - 17 これは既存の貸し手の立場からは「フリーライダー問題」とも呼ばれるが (IDA 2006)、その批判の矛先となっている中国自身も HIPCs 対象国に債務救済をしており厳密な意味では「フリーライダー」ではない (Reisen and Ndoye 2008: 42)。
 - 18 ただし、ドナーの拡散と取引費用の増大との間に直接的な因果関係は認められないという議論もある (Kragelund 2008: 556-559)。
 - 19 新興ドナーの存在が援助市場を競争的にするかどうかは実証されていないが、新興ドナーの登場を契機として DAC そのものがよりオープンになってきていることは確かである。一例として、OECD Development Assistance Committee Statement – 6 April 2011: Welcoming New Partnerships in International Development Co-operation を参照。
 - 20 なお、新興ドナーと伝統ドナーという分類方法そのものに疑義を唱える研究も多い。Saidi and Wolf (2011)は、ドナーのなかにある差異は、伝統ドナーと新興ドナーとの間の差異ではなく、「Development Assistance」と「Development Investment」というフィロソフィーの違いとする。前者は、チャリティー動機に基づいたものであり欧米ドナーおよびアラブ・ドナーの発想、後者は 70~80 年代の日本による「国益」主導型援助がリサイクルされたものでありアジアのドナーの発想と分類される。こうした、欧米型の援助とは異なる、日本を含めたアジアのドナーの共通性は、「Asian Model」(Söderberg 2010) や「Eastern Donors」(Paulo and Reisen 2010) として認識されるようになってきた。もっとも、アジアのドナーのなかにも多様性があるため (Kondoh et al. 2010)、各ドナーについて個別にみていく必要がある。